

— 人生読本 もくじ —

はじめに…………… 8

第一章 生きる態度

1. 何があってもあきらめない、いつか良くなる…………… II
2. 周囲と折りあうことも必要です…………… 17
3. 人は「情け」がすべて！…………… 23
4. 過去は明日のためにある…………… 31
5. あなたの人生はあなたが選んだんですよ…………… 40

第二章 お金に振り回されないために

1. いくら儲けたいのかハッキリさせましょう…………… 48
2. お金が人生のすべてやないですよ…………… 55
3. 大切な人とは、貸さない、借りないが鉄則…………… 62
4. 借金の返済で困ったら…………… 68
5. 貧乏は「悪」ではありません！…………… 72

第三章 病気や「死」との付きあい方

1. 百パーセント健康な人は、百パーセントいません 79
2. 心を病んだときは、心を休ませること 84
3. 不治の病にかかっても、死ぬまできちんと生きる 91
4. 「どう生きたか」が死相に出る 96
5. 大切な人が亡くなったときは、いっぱい泣きましょう 101

第四章 欲望は生きている証し

1. 「欲」は捨てたらあかんし、振り回されてもあかん 107
2. 我欲は抑えて、人の喜ぶ顔を見ませんか 113
3. セックスには励みなはれ! 118
4. 物欲と金銭欲はほどほどに 124
5. ただし、大きな未来だけは望みましょう! 129

第五章 人間関係につまずいたら

1. 新しい人間関係をつくりましょう 136

- 2. 悪い人間は遠ざけて、良い人に囲まれること……………142
- 3. 家族がバラバラになりそうになっても、

絶対に強い絆を結んでおくこと……………148

- 4. いじめにあつたら……………170

- 5. 「力」を笠に着る人間に出会つたら……………162

第六章 もし、死にたくなつたら

- 1. みんな生きるために産まれてきた……………168
- 2. 楽しかった過去を持たない人はいない……………174
- 3. 自分で自分を殺したら「地獄」に行くと思ひなはれ……………180
- 4. 悩みがあつたら誰かに相談すること……………186
- 5. 絶対に他人を巻き込むな！……………191

第七章 生きることを楽しみましよう！

- 1. 苦しいときは、「これが苦しみか」と分かること……………198
- 2. 幾つになつても「まだまだ、これから！」の精神で……………204
- 3. この世界、まだまだ未体験・未知だらけ！……………210

4. 明日は子どもたちが引き継いでくれます……………216

5. 死ぬまで前を向いて生きましょう！ ……………222

あとがき……………229

はじめに

この二〇一一年は、大変な年になりました。それは日本だけではありません。中東では民衆が立ち上がって、すごい権力を誇っていた大統領や権力者が次々と倒されたり、アフリカでは新しい南スーダンといった国が生まれたり、ギリシアは、国が破産するような事態にまでなったり、世界は混乱を繰り返しながら、まだ未来の世界がどのような姿になるのかさえよく分りません。

その中で、やっぱり私たちにとって、いちばん大変な出来事は東日本大震災だったでしょう。

三月十一日のあの大地震は、関西にある私どもの寺の建物まで揺るがしました。テレビをつけると、津波がどんどん家や田畑を飲み込み、船や車が流され、息が詰まるほどの光景でした。安全だったはずの原子力発電は、何ともお粗末な姿をして壊れてしまい、命にかかわる被害がまだまだ続いています。

私は十六年前、あの阪神大震災を体験しましたが、被害の大きさも、被災された方々の

苦しみも、あのときの比ではないことは容易に察しがつきます。

災害の復興も政権が不安定なこともあって、なかなか思うように進まない。それに、肝心の電力が乏しくなって、経済はますます悪くなる一方。いい大学を卒業しようが、どうしようが、就職さえままならない。家計を切り詰めても、まだ苦しい。子どもを思うように育てることも難しい。老後の心配も尽きない。今世とは、こんなに苦しい世界なのか…。そう思うと、ため息さえ出てきます。

私どもは人間と生まれてきて、ほんとうは楽しい人生を望んでいるはずです。未来は希望で輝いているのがほんらいの姿のはずです。でも、実際は違う。なんでや！ そう叫びたいのは、私だけではないでしょう。

この出版の企画は、三・十一の東日本大震災前にありました。でも、あの震災が起きて、生きるとはどういうことか、幸せとは何なのか、といったことを、もつともつと真剣に考えんとあかん、と思うようになりました。執筆にあたり、今を生きる方々の悩みや苦しみに、出来るだけまっすぐに向きあつて書きたいと思うようになりました。それが、出版が遅れた理由です。まあ、言い訳ですけど。

それに、ほんまにまっすぐ向き合うことができたんか、いわれたら、それは皆様のご判断によるしかありません。

人様の生死に係る仕事をしている僧侶の私ですが、実際にできることは、皆様の嘆きや悲しみに付き添い、一緒に泣くことだけかもしれません。そして念じることだけかもしれません。

それでも、皆さん、笑いましょう。わては、関西人でおます。そやから、言わせてもらいます。泣いた後には笑うこと。泣きながらも冗談をかますこと。そうして強く、たくましく生きていってくださいませ。それが、せめてもの私の願いです。

なお、この本は、どこからお読みいただいてもかまいません。また、一部分だけをお読みいただいてもかまいません。

何度も同じことを、あるいは同じようなことを、くり返し書いていますが、それは、そういった方々にも私が言いたかったことをお伝えしたかったからです。全部読まれて、くだいなあ、と思う方もおられるかもしれませんが。でも、そうした方には、私が何についていちばん言いたかったのが、きっと、お分かりいただけることでしょう。

西栄寺 住職 山田博泰

第一章 生きる態度

1. 何があってもあきらめない、いつか良くなる

まあ、ほんまにろくなことのない世の中になりました。

政治が悪い！ とか、アメリカが、いや中国が悪い！ いやいや、かみさんが悪い！
上司が悪い！ 経済が悪い！ ……ゆうても仕方がありません。何でも人のせいにするのは
簡単。でも、いくら人のせいにしても、悪い状況は何にも変わりません。結局、自分で何
とかするほかないんです。

こんな世の中、こんな境遇に生まれたことを「宿命」といいます。貧乏な家庭に生まれ
たのも、いい仕事が見つからないのも、体が悪いのも、全部が宿命です。

でも、だからといって「あきらめなはれ」ゆうてるんではないですよ。決して、そうい
ってるわけではありません。

大切なことは、その「宿命」の正体を見定めることです。貧乏には、貧乏になっている

原因があります。体が悪いのにも原因があります。何ごとにもこの原因があつて、結果があるはずです。ということは、その原因が何であるかを知ることができたら、改善できる、というのが道理です。

業績の悪い会社は、その原因を調べ改善することで、そして新しい道を模索して切り拓いていくことで、業績を改善します。

体が悪ければ、その原因をきちんと調べ、苦しくても薬を飲み、手術を受け、リハビリに励んでいけば、また社会に復帰できます。そんな例はいっぱいあります。

これが科学です。人生も科学的に考えてみれば、実は改善できる。そう私はいいたいんです。

坊さんが科学なんか持ち出すなんて、と思いはる人がおられるかもしれませんが、仏教と科学は別に矛盾しておりません。手術せんと治らんに「手術するな、信心で直せ」ゆうのは、それこそでたらめなオカルト宗教です。

絶対にあきらめないこと。これが肝心です。人生というもんは、あきらめたら、そこで道は止まる。詩人の高村光太郎さんは「僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る」と書かれました。それも真実です。

でも、私ならこう言います。「あなたの前には無限の道がある」と。まあ、私は詩人ではありませんので、偉そうなことは言えませんが…。

江戸時代の中ごろの米沢藩に、名君とうたわれた上杉鷹山うえすぎやうざんというお殿様がいました。この鷹山というお殿様、実は別の藩主の次男でして、元服してすぐに米沢藩に婿養子むこやうしに迎えられました。

ところが、何とそのときの米沢藩は、「超」がつくほどの借金まみれ。その額、二十万両といえますから、今のお金に換算すれば約二百億円という大変な金額になります。

米沢藩主の上杉家は、上杉謙信の流れをくむ名門です。で、ご存知のように上杉家は、関ヶ原の合戦のとき豊臣側につきましたので、お家断絶はまぬがれたものの、外様大名として幕府の厳しい管理下に置かれました。

でも、なにせ名門の家系ですから、どんだけ貧乏になっても家臣たちは自分から「辞める」とは言いません。またそれまでの上杉家のお殿様たちも、名を汚したくないとかいつて、けっして家臣をリストラすることはありませんでした。借金まみれなのに、何と約六千人もの家臣がいたといえます。

今でいうなら、借金が二百億円ある、どうみても再建できそうもない地方の小さな町の役所に、公務員が六千人いた、ということですよ。鷹山は、そんなところに婿養子に入つたのです。まあ、地獄に行くのと知っていて、乗り込むみたいな心境だったんでしょう。

で、いよいよ藩政の改革に取りかかった鷹山は、まずはじめに産業や経済に明るい優秀

な人材を用います。次には、藩主が江戸で生活するのに必要な金額を、年間千五百両から何と二百九両にまで減らしました。まず自分の生活費を、徹底して切り詰めたんです。

それから、武士である家臣たちにも汗水たらして田畑を耕すように指示し、農作物の収穫を拡大し、収入を増やします。クワを植えて絹織物も奨励します。また口紅の染料や薬としても用いられる「べにばな紅花」などの特産品も作って、江戸にどんどん売り込みます。

そして、自分もまた貧しい家臣や農民と同じように粥かゆをすすって貧乏に耐え、藩校を立てて武士も農民にも身分を問わずに教育を行き渡らせ、未来の人材を作るのです。そうして最後には、ついに財政を黒字が出るまでに変えたのでした。

そんな鷹山が、次のような言葉を残しています。

「成せばなる 成さねばならぬ 何事も 成らぬは人の 成さぬ成けり」

やろうと思つたら、出来る。出来ないのはやろうとしないからだ、という意味です。

とはいえ、鷹山というお殿様がやったことは、すごいがまんと忍耐が必要なことだったでしょう。しかも自分だけが、あるいは家臣や民だけが忍耐するということではなく、忍耐をみんなに分かちあつて、希望や夢もまたみんなに分かちあつたということです。そんな立派な人がこの日本を創ってきたのです。まあ、今の政治家とは比べ物になりませんけど。でもここで私がいいたいのは、政治家への不満ではありません。どんだけしんどくても、

希望を捨てたら終わり。今の問題は何かをきちんを見定めること、です。

そのためには、人の意見を聞く謙虚さも必要です。慢心はいけません。木で鼻をくくつたような我がままな人は、それだけで自分を見失っている、ということを知らないといけません。

それから、はっきりとした目標を立てて、ただだけつらくてもがまんしながら、その目標を目指すこと。はっきりいえば、行動することです。目標を立てても行動しないと、何にもなりません。でも、そんな当たり前のことが、実はとっても大切なんです。

どうか、絶対にあきらめないでください。今の境遇や苦しい現状に対して、誰かのせいにして、こんなもんじゃないとあきらめたりすることは、結局は自分の可能性を、自分で閉ざしているということです。

俺は、こんなところで終わる人間やない。私は、もっともっと幸せになってやる。そういう意味でのプライドを、人間としての誇りを捨てないでください。人間には誰にも、どんな年齢になろうとも、どんな境遇になろうとも、現状を変えていく力を持っています。

あなたは人間です。人間だけが、ゆいいつ、自分の手で自分の未来を切り開いていける動物なんです。ですから、あの人に出来て、あなたに出来ないことはないんです。もちろん、個性や宿命の違いはありますから、あなたらしい未来があるでしょう。でも、未来は

あるんです。どうか、それを信じ抜いて生きてください。私はそう、声を限りに訴えます。

私は、中央佛教学院を出てから、僧侶として一本立ちして生きていくまでにずいぶんと時間がかかりました。途中、キャバレーのアルバイトやタクシーの運転手をしたこともありました。身は僧侶でありながら、ほんとうにいろんな仕事もやってきました。

今思えば、ようやったな、と感じます。でも、決して僧侶としての生き方だけは捨てませんでした。自分のお寺を建てることは夢でしたから、何としてもその目標を実現したいと思いました。決して、あきらめたりはしませんでした。

書けば一冊の本になるほど（実際に、私の人生は『曲がり道の人生』というタイトルで出版させていただいております）、たくさんのことを経験してきました。間違ったこともありました。苦労もしました。失敗もしました。でも、夢をあきらめなかったから、こうして西栄寺の住職として、現在、過ごさせていただいています。

曲がり角だらけの人生でしたが、今ではそういう過去の全部が、今の自分を作る上で必要だったんやなあ、と思うことができます。

でも、もし私が、夢に向かって生きてこなくて、人生をこんなもんやとあきらめていたなら、そうした間違いや苦労や失敗などは、そのまま嫌な思い出として残ったままで、きっと私は世をすねていたことでしょう。

だいたい、こんな私に出来て、あなたに出来ないことなんかおまへんやないですか。こんな短気な偏屈おやじでも、人生をあきらめなかつたから、こうして夢を実現できたんです。

私はもう棺桶に片足突っ込んだような年齢ですが、それでもまだまだこれからや！と思っております。死ぬまで前に向かって、未来に向かって生きていくつもりです。みなさん、一緒に、どないですか？

2. 周囲と折りあうことも必要です

私は結構、我がままな男です。だいたい一回、自分が言い出したら、後に引くことはそんなにありません。でもね、みなさん。私はこう見えて結構、がまん強いんです。そんな私ですから、これは、すごく言いにくいことなんです。まあ、私も常日ごろから心がけていることを書きます。

周囲と折りあうことも必要、とタイトルに書いていますが、間違つてほしくないのは、決して「何でも妥協しなはれ」なんて言っているわけではないということです。

ここで大切なことは、二点あります。

一つは、懐ふとこころの深い人間になること。そして二つ目は、謙虚であること。このことが言いたいわけです。

そこで、一つ目の懐の深い人間について。人間の器は、懐の深さで決まります。ようするに、心のキャパシティーが大きいかどうか。

ちっちゃな器には、少しの水しか入りません。でも大きな器には、たくさん水が入ります。これは当たり前のことで、人間は懐が深いほうがいい、ということは自然の原理ともいえます。

では、懐の深い人間とは、どういう人のことをいうのでしょうか。

三省堂の『大辞林』で調べてみますと、一．「度量が広い。包容力がある」、二．「理解や能力に幅がある」、三．「相撲で、身長が高く、両腕の長い力士に見られる能力で、四つに組んだとき、両腕と胸とで作る空間が広く、相手になかなかまわしを与えないことをいう」とあります。ここでは、一と二の意味のことです。

では「懐」って何でしょう。

これは、着物（和服）の胸の周りの中の空間のことを指します。昔の人はこの懐に、護身用の短剣や財布や書状など、大切なものを入れて持ち歩いたので、自然と「懐」とは人

間の内側＝心のことを指すようになりました。

「懐が寒い」とは、「お金がない」の意味。「懐を探る」とは「相手の心を読む」といった意味。「懐に抱かれる」とは、自然や故郷など大切なものの中に入って安らぐことを意味します。

さて、懐が深い人は、小さなことで心が揺れ動いたりはしません。相手の言うことが自分の意見と違っていても、多少のことなら受け入れます。

ようするに絶対に必要なことや、どうしても守らなければいけないことなどさえ侵されなければ、それを受け入れる、ということなのです。

また、多少、相手が小ずるいことをしていても、小さなウソをついていても、笑って見逃せるし、そんなことで人を追い詰めない、ということなのです。逃げ場を与えてあげること、つまり弁解を受け入れてあげることが、人には、ときとして必要なことです。

もうちょっと、具体的に書きましょう。お母ちゃんは、子どもに「勉強せえ！」ゆうことも、確かに仕事の一つでしょう。

でもね、懐の深い母というものは、少々、子どもがテストの点数が下がったからといって、すぐにガミガミ怒りません。どうすればその嫌いな科目が好きになれるのかを、子どもと一緒に考えて考えます。そうして自然と、子どもが勉強を好きになるような環境を整

えていくでしょう。

でもなぜ、そんなことができるのでしょうか。それは、まさに子どもを懐に抱くようにして育てているからです。慈しみ、子どもを信頼しているからです。

子どもを信じる、ということは、結局、自分自身を信じているからできることです。これが大切なポイントです。

お父ちゃんの場合は、というと、ちよつと私、緊張します。基本は働くことで精いっぱい、子育てのことはお母ちゃんに任しているのが現状でしょう。そして多分「まあ、少々ええやないか」とゆうては、お母ちゃんに「あんたがそんなんやから、子どもが勉強せんのや！」ゆうて怒られます。

しかし、明治生まれの私の父はとても厳格な人で、すごく怖い人でした。間違つたことをしたら、ばしばし殴られました。でも、それでもいつも、愛情だけは感じ続けていました。

今どき、そんな父親像は通用しないでしょう。でも、男は背中を見せて生きる、ということだけは昔も今も同じではないでしょうか。

子どもが、人間としての基本を外したときだけはしっかりと怒る。これもまた、その男にしっかりとした人生哲学があつて、その道を踏み外さずに生きているという自信があるから出来ることです。

…と、こう書いてみて、うちの子どもがこの本を読んだら「お父ちゃん、ゆうてることと、やってること違うやん！」って言われそうですけど。

つまり男や女ほど、細かいことでやいやい言います。ですから私は、「つまりんこと得意いやい言うな」というわけです。

「まあ、ええやん」の精神、といってもいいでしょうか。少々のことなら「まあ、ええやん」ゆうて生きていきましよう。そのほうが、人生楽しいですから。

では、二つ目の「謙虚な人間」について。いや、もう私、こう書きながら、汗出てますけど。

謙虚なふりをするのと、ほんとうに謙虚であることは、月とスッポンほどの違いがあります。謙虚なふりをするやつは、その場をごまかして生きていく人間です。そんな人間に、ろくなやつはおりません。

謙虚な人は、自分のことを真剣に考えて意見してくれる人には、どんなに厳しいことを言われても、しっかりと耳を傾けます。そうして、反省すべきところはしっかりと肝に銘じて、失敗や困難を克服していきます。

前のところで書いた、上杉鷹山というお殿様は、とつても謙虚な方でした。学問の師匠には、相手の身分が自分より低いにも関わらず、懸命に学び、尽くし抜いてこられました。

孔子さんの言葉に、こんなのがあります。

「命を知らざれば、もって、君子たること無きなり。礼を知らざれば、もって、立つこと無きなり。言を知らざれば、もって、人を知ること無きなり」

私なりに訳せば「自分の力ではなくて、天命によって君子（指導者）になれたのです。だから、礼儀を知らなくては、人様の上に立つことはできません。また、人様の言葉を聞き、その奥にあるほんとうの心を知ることが出来なければ、君子とはいえませんが」ということになるでしょうか。

これは、指導者論としても有名な言葉です。孔子さんは、つまり人は謙虚であれ、とおっしゃっています。たとえ部下が二人しかいなくても、立派なリーダーです。現代では、誰もが人の上に立つリーダーとしての資格を持っています。

それは逆にいえば、小さなまま終わる人間や、アホみたいな中身のまま終わる人生を送る人間は、結局は謙虚ではなかった人間である、ということでしょう。

たとえ総理大臣であろうが、誰であろうが、そんな地位や肩書に関係なく、礼儀知らず、謙虚でない人、人の意見を聞くことが出来ない人、人の心を知ることができない人は、小さな人間、アホな人間ということなのです。

立派な人間ほど謙虚なんです。

え、私？ うーん。謙虚でありたいとは、毎日思つて生きています。はあ……。やっぱり、冷や汗が出てきました。

3. 人は「情け」がすべて！

「情けは人のためならず」という言葉があります。でも、ほんとうにそうなんですか？

ここでいう、人のためにならない「情け」とは、「中途半端な情け」のことで、それはよくない、というふうに解釈したほうが私はいいと思います。

では、ここでも三省堂の『大辞林』で「情け」とは何かを見てみましょう。

こう書いています。

一．「他人に対する心づかい。哀れみや思いやりの感情」、二．「男女の愛情。恋愛の情。恋心」、三．「男女の情事。色事」、四．「人としての感情」、五．「風流の心。趣味を解する心」、六．「ふせい風情。おもむき。情緒」、七．「義理」。

そうして、はじめに紹介した言葉とともに「情けに刃向かう刃なし」という言葉も紹介されています。これは、ほんとうの「情け」は何にも勝る、何より強い、という意味です。

「情」という漢字がつく熟語はたくさんあります。感情、心情、愛情、友情、同情、激情、欲情、情感、慕情、厚情…。

また「情にほだされる」「情に厚い」「情にもろい」「情がこまやか」「情を交わす」「情け深い」「情けない」など、「情」にまつわる言葉もたくさんあります。ほかにもまだまだあると思いますので、皆さんもちょっと考えてみてください。

武田信玄という戦国武将を、皆さんもご存じでしょう。信玄の軍は「風林火山」と書いた旗をひるがえし、上杉謙信と五回に及ぶ「川中島の合戦」を起こしましたが、結局、決着がつかなかったことは日本史の上で有名なお話です。

「敵に塩を送る」という、これも有名な言葉がありますが、これは両軍がこうした敵対関係にあったにも関わらず、上杉謙信が敵である武田側に塩を送ったことに由来しています。

信玄が主である甲斐の国は、海に面していなくて塩を輸入に頼らざるを得なかったのですが、このとき同じく敵対関係にあった今川氏に「塩止め」という経済封鎖をされていた。そこで謙信は、武田側の民が苦しんでいるのを見るに見かねて、塩を送ったというわけです。

こうしたお話は、この二人の戦国武将が、情に厚い、人格的にも優れた人物であったと

いうことを表しているのでしょう。ですから、武田信玄も上杉謙信も今なお戦国の名武将とうたわれています。

さて、武田信玄の戦略や戦術を後世に残すために書かれた『甲陽軍鑑』こうようぐんかんという書物があります。

そこには、勝利のかなめの一つとして「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」と書かれています。

武田信玄は、ただ戦争に明け暮れていたのではなく、領内の農民の豊作のために治水工事を行ったり、金山を開発して財政を豊かにしたり、さまざまな事業を行っています。

「人は石垣、人は城、人は堀」とは、自分の城を持たなかった信玄にとって、人材、領民からの信頼こそ城や石垣や堀に相当するものだ、という意味です。

そして「情けは味方、仇は敵なり」とは、憎しみや不信よりは、人を信頼し、情け深く接し、そのことで人々の信頼を勝ち取っていくことこそ、平時にあつては国を榮させ、戦にあつては勝利を勝ち取る最大の秘訣である、ということなのです。

信頼がなければ、人は動きませんし、誰もが自分を最優先します。そんな国は滅びてしまふ、ということなのです。

これも指導者論の一つといえるでしょうが、つまりは人間として生きる基本的な道を教

えているといえそうです。

先ほどの熟語の紹介から外れていた言葉に、「非情」があります。

「非情」とは、「心が無い」「心が冷たく凍っている」といった意味になるでしょうか。「無情」という言葉もあります。これは、まさに「心が無い」という意味です。

「非情」と「無情」に対する言葉としては、「有情うじょう」があります。

仏教で「有情」の衆といえば「人間」など動物のことに成り、心を持っている生き物のことです。ですから「非情」や「無情」のやからとは、まさに人間以下、動物以下の存在ということなのです。

私は「人として生きる」ということは、「情けを持って生きる」ということだと思っています。それこそが、まさに「有情」の衆です。

ところが現代は、簡単に他人を信じていることができないう世の中です。かけた情けが仇となつて帰ってくることも多いでしょう。ですから、私は何でも簡単に人様の言うことを信じなさいとはいえません。人間を見抜く冷静な目は必要でしょうし、簡単にだまされんようにせなあきません。

でも、情けは絶対に必要です。

「情」という漢字は、りっしんべんの「↑」という部首と、「青」という漢字を組み合

わせたものです。「↑」とは「心」のことです。ですから「情」とは、「心が青い」ということになるでしょう。なぜ「情」が大切なのか、ということをも、実はこの漢字じたいが表しています。

「青」とは、空の色、海の色です。ですから、「心が青い」とは、空のように、海のように、どこまでも澄み渡る心の状態を示しており、どこまでも広く深い心のことを表しています。それが「情」という漢字の持つ、ほんとうの意味だと私は思います。

ここで、男女の恋愛について考えてみましょう。関西人は「好きや」とか「惚れてる」とは言いますが、「愛してるんや」なんて、めったに言いません。まあ、今の若い人のことは知りませんが。

「君のことを愛してる」なんてのは、私にとって、歌の歌詞か、テレビドラマや映画の中の話です。ですから「愛する」ゆうても、あんまり実感として何を指すのか、実はよく分かりません。

だいたい「愛情」という言葉は江戸時代まではあまり使わなくて、それまでは「情愛」と語られていることが多かったんです。また「交情」ともいまして、これは「お互いに情を交わしあう」ということになります。セックスもベタベタすることも、みんなこの言葉にひっくるまれていました。つまり、恋愛には肉体関係も精神的な関係も一緒に語られ

ていたわけです。

プラトニッククラブなんてのも、あるにはありましたが、まあこれは、ある家臣がお姫様のことを惚れていても、表情にも出さないし、何にも出来ないというような「禁断の愛」の部類に入ったことでしょう。そんなことをすれば、打ち首や切腹といったことにもなりかねませんでしたからね。

それに、もともと「愛」という言葉は、あんまりいい意味では使われていませんでした。「愛」という言葉が、いい意味で使われ出したのは明治時代になってからです。

しかもそれは、キリスト教で「神の愛」とかって使われ出してからです。江戸時代まではキリスト教は禁止されていましたが、明治時代には、西洋の思想を受け入れるにあたって、全面的に禁止が解かれました。

ですから、明治時代初期には、内村鑑三、新渡戸稲造、新島襄などのキリスト教徒がいらっしゃいましたし、彼らは、とりわけ教育の分野で活躍しました。現在でも続いているキリスト教系の大学でも、同志社大学、関西学院、梅花女子大、明治学院、青山学院、東京女子大など、数えきれません。

こうして「愛」という言葉は、いい意味に変わっていったんです。

「愛」という言葉のほんらいの意味は、「愛しい^{いと}」からきているんだろうと思います。

「愛しい」とは、もともと「好きで好きで、離れがたい、未練がいっぱい」ということで、それは「欲情」の一つでもあったわけです。ま、そうした言葉の歴史はさておいて、現在使われている意味で、ここからはお話しします。

ところで恋愛関係は、最初のころはラブラブでも、そのうちケンカやイザコザも起こります。惚れあって夫婦になったけれども、数年も経たないうちに、シラツした雰囲気になって、「亭主元気で留守がいい」なんてことになりかねません。

亭主は金だけ稼いできたなら、後は顔も見たくない、話もしたくない、ということでしょうか。子どもも、小学生のときまでは、お父ちゃんに「パパ、パパ」と甘えてきますが、中学生にでもなるものなら、「臭い」「ダサイ」なんて疎んじられる始末です。

さて、そんなとき皆さんならどうするでしょう。いや、そうならないための秘訣はないのでしょうか。

答えは「ある」に決まっています。ただ、ちょっと難しい。

「愛する」という言葉を、じっくり見てください。愛するということは「愛」を「する」ということで、「する」とは「行動」のことです。そうして「する」という言葉には、自発性が含まれています。

つまり、愛する、ということとは、自分の責任で、自発的に行動するということになりま
す。最初は見かけにだまされた、ということであっても、愛したのはあなたです。自分で
責任を取らなあきません。

ですから、大切なことは、何があっても、どんなときでも「愛し抜く」ということにな
るでしょう。毎日が愛する努力の連続であれば、毎日が新鮮です。それに、そうすれば相
手も必ず変わってきます。

こんな偉そうなことを書いている私ですが、実は私も離婚を経験したことがあります。
すごく簡単にいうと、愛し抜けなかった、ということなんです。

でも今の奥さんには、一生懸命、愛する努力をしています。まあ、こんなこと書くのは、
めっちゃくちや恥ずかしいんですけども。つまりは、愛し抜く、惚れ抜くことができへん
のやったら、別れなはれ、と、ゆうことになります。

でも、ほんとうに、これは難しい。でも、やってできへんことはありません。それは、
相手の長所も短所もぜんぶ受け入れて、抱きかかえて生きることです。これは、懐の深
さに通じます。情に厚い人間とは、つまりは懐の深い人間ということと同じです。

情けがなければ人間ではない、これは仏教の教えにも通じることです。情け深く、どこ
までも深く、広い心を持って、あるいは持つように努力して生きていくのが、私、人生や
と思っております。